

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

考古学における「ふくげん」のエスノグラフィー：  
共同研究：考古学の民族誌：  
考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2018-02-01 キーワード: 作成者: 吉田, 泰幸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00008688">https://doi.org/10.15021/00008688</a>

共同研究 ● 考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究（2015-2018年度）

本共同研究は2015年10月に開始され、本稿執筆時までに計6回（2015年度2回、2016年度3回、2017年度1回）の研究会を開催している。共同研究の開始直後に、代表者のジョン・アートル（金沢大学）が本研究の背景の説明を本誌152号に掲載している。その文章にあるように、本共同研究の目的は、「考古学はどのように我々をとり巻く世界を変えているのか」に関するエスノグラフィーである（アートル2016: 10）。

ところで、「考古学のエスノグラフィー」とは何だろうか。共同研究での議論を通じた筆者の理解では、エスノグラフィーの古典的なイメージは、人類学者が異郷で長期間を過ごす中で得た深い理解を人類学者のホームに持ち帰るというものだが、現在では趣味や宗教、社会運動を基盤とした共同体、研究所やフィールドワークの現場、企業社会もその対象になっており、本共同研究におけるエスノグラフィーは後者になる。代表者の文化人類学者であるアートルには、考古学は「異郷」のように見えており、「なぜこんなことが行なわれているのだろうか」との疑問をきっかけに、考古学をエスノグラフィーの対象とすることもしやすいのかもしれない。しかし、筆者のような大学学部生の頃から考古学のトレーニングを受けてきた者にとっては、自分が何気なくなっていることを俯瞰的視点で見直し、考古学的実践を「不思議なこと」として捉え直す必要があるだろう。

考古学のエスノグラフィーの先行研究では、考古学の営みの中でも、とくに発掘調査の局面に焦点を当てている（Edgeworth (ed.) 2006）。しかし、考古学の実践は発掘調査だけでなく、その前後にも、そしてアカデミアに限らず様々な場でも考古学的知識の形成と利用が行なわれていることから、本共同研究では考古学の営みを広く捉えることとしている。そして共同研究を進める中で、「Archaeological Visions」をキーワードとし、考古学が「みえないものをみえるようにしている」場面に着目するとともに、考古学的実践がどのような「ものの見方」にもとづいて行なわれているのかを詳細に分析することを試みている。具体的には、考古学者が様々な人々と共同で研究成果を視覚化するプロセス、関連科学の新しい技術によって考古学的実践の中で新たなビジョンを得る過程や、その際に起きる分野間の緊張関係、考古学に潜む政治性等に着目しようとしている。

本稿では考古学における「みえないものをみえるようにす

る」活動の1つである「ふくげん」を例として、筆者自身が行なってきたことを見直しながら考えてみたい。

### 縄文土器の「ふくげん」

「ふくげん」と平仮名で表記したのは、「復原」（Restoration）も「復元」（Reconstruction）も意味は異なるが読みはともに「ふくげん」であり、修復（Conservation）、レプリカ作成による復元、建物の再建も「ふくげん」と称され、これら様々な活動を「ふくげん」で包含したいからである。

「ふくげん」は考古学的知識の形成・利用の中でも、重要な役割を果たしている。たとえばアートルが研究対象としている日本各地の遺跡公園等の復元建物（アートル2017）、本共同研究会にオブザーバーとしてほぼ毎回参加している歴史復元イメージ画家・安芸早穂子による復元画（安芸2017）等は、考古学が社会に影響を与える際の重要な媒介である。

ここでは、筆者も多数でがけた縄文土器の「ふくげん」についてとりあげる。何千年も前につくられた縄文土器は、発掘調査で大量に出土している。まったく壊れていない状態で掘り出されることは稀で、多くの場合破片の状態の研究室に運ばれ、「ふくげん」される。この場合は「元の状態」に戻すのだから、「復原」あるいは「修復」と捉えられそうだが、この行為によって何を見えるようにしているのかに着目したい。まずは、「ふくげん」のプロセスを紹介する。

第1段階はバラバラになった破片同士をつなぎ合わせ、あたかも3Dジグソーパズルのような作業となる。この作業は人によって得手不得手があり、つながる破片が見つかった後、それらをズレないようにセメダイン等で接着し、立体的に組み上げていくには手先の器用さも必要である。筆者はそれらの作業が比較的苦にならない方だったので、大学博物館所蔵の縄文土器を多数「ふくげん」した経験がある。そこでは、生活の道具であった土器が本来どのような形であったのかを



土器「ふくげん」は互いに接合する破片を探すことから始まる（2005年2月22日、名古屋大学博物館）。

見えるようにすることに主眼があった。多くの場合、もともとあったはずの細かい破片まで完全に見つかることはなく、その空白の部分は石膏その他の補填材で埋める必要がある。これは「ふくげん」土器の強度を高めることが主な目的だが、本体の土器とは見た目が異なるこの部分を最終的にどうするかは、じつはとても重要な問題である。しかし学生だった当時は思い返すと、筆者はよく考えず、教員や先輩の指示や、展示のためという名目で、その部分を本

体の土器に似せる形で着色していた。この問題の重要性に思い至ったきっかけの1つを次に紹介したい。

### 考古学における「ふくげん」は何を「ふくげん」しようとするのか

土器は大量に出土し、考古学の方法の1つである型式編年上重要な資料であるため、生物学や岩石学のように「標本」とよばれることもある。土器は大量に見つかるが自然物ではなく、人間の手によってつくられたものであるがゆえ、ときには現代人が見ても「傑作」が出土することがある。その「傑作」の復元はときに様々な問題を引き起こすこともある。

週刊誌『サンデー毎日』の2015年7月19日号に、国宝土偶や重要文化財の土器の「ふくげん」（「ふくげん」してあったものを解体し、再「ふくげん」したものを含む）に対して、「縄文土器・土偶が変造されている」、「やりすぎ復元」と名指しする記事が掲載された。そこには「ふくげん」前後の写真も掲載され、上記の筆者の「ふくげん」プロセスに見たような破片同士を接合した痕や、出土した時にはあった表面のヒビすらも見えなくなり、新品同様の仕上がりになっている。記事ではそれを否定的な意味合いで「ピカピカ仕上げ」と名付けている。私は土器「ふくげん」を行なったことのある考古学者として、国宝土偶や重要文化財の土器を今のような姿にするというのもある程度は理解できる。一方、そうではない週刊誌記者の側から見ると、「ふくげん」前後を見比べて「変造」とみなしてしまうのも理解できなくはない。

記事では考古学者・博物館学芸員の様々な反応も掲載されていた。それらは製作された当時の姿に戻すべきで「ふくげん」の際にカルテのようなものを作成すれば「ピカピカ仕上げ」も問題ない、土偶や土器は当時の人々によって「壊された」ことに象徴的な意味があったはずなのでそれが分かるようにするべきである、将来的な再「ふくげん」に備えて樹脂の種類は見直すべきだとの意見が出されている。また、この記事には「在野の考古学研究者が怒りの告発」というリード文もついており、それが発端らしいのだが、筆者の大学院時代の指導教員によると、この研究者の師匠とも言える人は、「復元の名人」と称されていたそうである（その師匠によって復元された土器が解体されて再「ふくげん」されることに複雑な感情を抱いているからこそこの「告発」とするのは邪推だろうか）。こうしてみると、土偶や土器がつくられてから地中に埋まり、掘り出され、時に「名人」の手によって「ふくげん」され、展示され、さらに将来的には研究が進み、それらの位置付けにも変化が訪れるはず…という「ライフストーリー」のうち、どの時点で重きをおき、何を見えるようにしたいのか、どういった価値を「ふくげん」すべきかで意見が異なってくると言える。

先に筆者自身は土器の「ふくげん」において、補填材の部分は土器に似せて着色したと述べたが、その際、完全に似せてはいけなく、ここは土器片が見つからなかった部分と明示



（今のところは）見つからない部分に補填材を入れて土器「ふくげん」はひとまず完成（2005年3月10日、名古屋大学博物館）。

しなければならないという意識もあった。また、完全に似せようとしても無理であった。しかし、現在は上記のような「ピカピカ仕上げ」にすることは技術的に可能である。それゆえに、新しい「ふくげん」はかつてはなかった反応を引き起こし、「ふくげん」についての考えの相違もいっそう明らかになることによって、その実践の中で何が起きているかを再考する機会が訪れたともいえる。

考古学における「ふくげん」は、唯一の正解があるような単純なものではない。筆者が「ふくげん」した土器のように大学博物館に展示される学術「標本」としての意味合いが強いものと、国宝や重要文化財等になった「傑作」では、それぞれに関係する人々も異なり、「ふくげん」によって何を

見るようにしたいかも異なってくる。ここで問題になっていることの1つは、どういった「ふくげん」がどのコンテキストで真正なものと合意されているのか、であろう。「ふくげん」の真正性は様々な人々とモノの関係性の中でつくられる。創建当時の姿をよく残して、それを維持するために絶えず修復が行われている石造建造物の場合も、その文化「財」としての価値はそうした関係性の中で生じていることを指摘した研究もある（Jones and Yarrow 2013）。考古学の「ふくげん」についても、真正性、モノと人の関係性というキーワードで改めて捉え直す必要がある。

考古学者である筆者が考古学のエスノグラフィーにとり組むというのは、これまでの実践を俯瞰的に振り返り、そこで獲得した視点で現在行われている考古学的実践を再考し、そのより深い理解に達することだと考えている。その歩みをとおして今後も共同研究全体の議論に貢献していきたい。

#### 【参考文献】

- 安芸早穂子 2017 「縄文人をどのように描いてきたのか」 吉田泰幸、ジョン・アートル編『Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016』pp. 60-76, 金沢：金沢大学国際文化資源学研究中心。
- Edgeworth, M. (ed.) 2006 *Ethnographies of Archaeological Practice: Cultural Encounter, Material Transformations*. Oxford: AltaMira Press.
- アートル, ジョン 2016 「考古学の現在を掘る」『民博通信』152: 10-11.
- 2017 「縄文時代の復元建物の実態調査」岩手県一戸町教育委員会編『御所野遺跡環境整備事業報告書Ⅲ』pp. 67-79, 岩手県一戸町：岩手県一戸町教育委員会。
- Jones, S. and T. Yarrow 2013 Crafting Authenticity: An Ethnography of Conservation Practices. *Journal of Material Culture* 18(1): 3-26.

#### よしだ やすゆき

金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター特任准教授。本共同研究代表者のジョン・アートルとの共編著に『Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016』（金沢大学国際文化資源学研究センター 2017年）、共著論文に *Archaeological Practice and Social Movements: Ethnography of Jomon Archaeology and the Public*. *Journal of Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University* 2 (2017) がある。